地域の在宅医療・介護ニーズに対応

「古河訪看ＳＴけやき」開設

徳洲会54番目

古河徳洲会訪問看護ステーションけやき（茨城県）が2月1日、古河総合病院内にオープンした。同院を関連病院とする訪問看護ステーション（訪看ＳＴ）は2カ所目。地域の在宅医療・在宅介護ニーズに対応する体制強化が狙い。現在、スタッフは3人で、登録患者数は5人。主に同院を退院した患者さんのフォローが中心だが、ターミナルケアも実施している。

（左から）近藤看護師、藤村所長、加藤看護師。けやきは古河市のシンボルのひとつ

訪看ＳＴは利用者さんの自宅に看護師らが赴き、療養上の世話や必要な診療の補助サービスを提供する事業所。徳洲会グループも積極的に展開しており、古河徳洲会訪看ＳＴけやきは54カ所目の訪看ＳＴとしてオープンした。開設の経緯を藤村宏江所長は「地域の在宅ニーズに応えるための体制拡充」と説明する。「古河病院を関連病院とする訪看ＳＴは、すでに13年に開所した『訪看ＳＴはなもも』がありますが、地域には高齢の方が多く、同院をずっと利用してくださる方もいます。福江眞隆院長が地域との関係性を大事にしていることから、さらにサービスを提供しようと当訪看ＳＴをオープンしました」。

現在、スタッフは3人。藤村所長をはじめ、いずれも同院での勤務経験をもつ。登録患者数は5人で、主に同院を退院し在宅で過ごす患者さんのフォローが中心だ。インスリンの投与や透析患者さんへの継続的な足の処置など、対応するケースはさまざま。終末期の患者さんもいるという。また、同院の通所リハビリテーションを利用している方が体調不良となり、病院から連絡を受けたうえで患者さん宅に赴きＰＣＲ検査の検体採取を行うこともある。

体調不良の患者さん宅を訪れPCR検査の検体を採取することも

地域に24時間対応の訪看ＳＴが少ないこともあり、同院から入院患者さんの退院後のフォローに関する相談や、近隣のケアマネジャーから利用に関する相談も寄せられている。加藤真由美看護師と近藤千恵看護師は口をそろえて「相手に合わせ継続した看護が提供でき、とてもやりがいがあります」と、ケアマネジャーの資格取得など、キャリアアップにも余念がない。

藤村所長は今後、グループ内外の医療機関や介護事業所との連携強化を目指す。「施設・事業所の機能を生かしてトータルケアを提供できるように連携を深めたい」と意欲を見せている。

◆

古河徳洲会訪看ＳＴけやき、訪看ＳＴはなもも以外の徳洲会訪看ＳＴは次のとおり（定期巡回・随時対応型訪問介護看護含む）。

訪看ＳＴ徳洲苑しろいし（北海道）、定期巡回・随時対応型訪問介護看護徳洲苑しろいし（同）、訪看ＳＴきょうあい（同）、共愛会ケアステーション（同）、札幌ひがし徳洲会訪看ＳＴ、札幌徳洲会訪看ＳＴ、緩和ケア訪看ＳＴ札幌、富谷訪看ＳＴ（宮城県）、訪看ＳＴひまわり（山形県）、新庄徳洲会訪看ＳＴ（同）、羽生訪看ＳＴ（埼玉県）、訪看ＳＴほのぼの（千葉県）、訪看ＳＴわらび（同）千葉西訪看ＳＴ、訪看ＳＴシルバーケア（千葉県）、訪看ＳＴたてやま（同）、武蔵野徳洲会訪看ＳＴ（東京都）、東京西くじら訪看ＳＴ、茅ヶ崎駅前訪看ＳＴ（神奈川県）、湘南藤沢訪看ＳＴ（同）、大和徳洲会訪看ＳＴ（同）、湘南藤沢訪看ＳＴ（同）、愛心訪看ＳＴ（同）、湘南厚木訪看ＳＴ（同）湘南厚木訪看ＳＴ（同）、愛心訪看ＳＴ葉山支所（同）、訪看ＳＴわかば（静岡県）、高蔵寺訪看ＳＴのぞみ（愛知県）、大垣徳洲会訪看ＳＴ（岐阜県）、近江草津徳洲会訪看ＳＴ（滋賀県）、宇治徳洲会訪看ＳＴ（京都府）、京田辺訪看ＳＴ（同）、城陽訪看ＳＴ（同）、定期巡回・随時対応型訪問介護看護宇治徳洲会（同）、東大阪徳洲会訪看ＳＴ、野崎訪看ＳＴ（大阪府）、野崎訪看ＳＴ四條畷支所（同）、よろこび訪看ＳＴ（同）、よろこび訪看ＳＴ八尾若草支所（同）、岸和田徳洲会訪看ＳＴ（同）、岸和田徳洲会訪看ＳＴかいづか支所（同）、松原徳洲会訪看ＳＴ（同）、高砂訪看ＳＴきらめき（兵庫県）、神戸徳洲会訪看ＳＴ（同）出雲徳洲会訪看ＳＴ（島根県）、宇和島徳洲会訪看ＳＴ（愛媛県）、福岡徳洲会訪看リハビリＳＴやよい、福岡徳洲会定期巡回ケアステーションぴーす、訪看ＳＴみずほ（鹿児島県）、訪看ＳＴ花みずき（同）、名瀬徳洲会訪看ＳＴ（鹿児島県）、訪看ＳＴいこい（沖縄県）、ちゅうとく訪看ＳＴ（同）。

グループ病院看護師へ訪問看護の魅力発信！

社徳看護部説明会開催

参加者に説明する遊佐・常務理事（右から2人目）と佐々木部長（その左）

一般社団法人徳洲会（社徳）看護部は2月9日、訪問看護師募集オンライン説明会を開いた。徳洲会グループの病院に勤務する看護師対象で、昨年に続き2回目。全国から前回を上回る39人が参加した。

冒頭、社徳看護部の佐々木和子部長が挨拶。国が在宅での医療・介護を推し進めるなか、徳洲会グループでも訪問看護ステーション（訪看ＳＴ）の拡充を図るなど在宅看護の強化に取り組んでいることを強調し、その方針は今後も変わらないことを示した。そのうえで「在宅医療・在宅介護の推進は看護の力の見せどころ。訪問看護師の仕事をイメージしていただき、興味をもってもらえたら、うれしいです」と呼びかけた。

前半は、社徳の遊佐千鶴・常務理事が訪問看護の概要を解説。あらためて、超高齢社会を迎えるなか、注目され拡大しているサービスと指摘した。現在、全国の訪看ＳＴ数は約1万2000に上り、年間700～800のペースで増えていること、24時間対応やターミナルケアなど期待されている役割も大きくなっている状況を示唆した。

訪看ＳＴについては、患者さんが自宅で療養生活を送れるように医師や多職種（保健師やリハビリセラピスト、管理栄養士、事務職など）と連携しながら、在宅で看護を提供する「事業所」と説明。規模は小さくても、事業所番号を付与されることから、一部署ではなく病院や企業と同様、独立した組織体であることも強調した。グループの訪看ＳＴを今年度中には60カ所に増やす意向も明かした。

訪問看護師に求められるスキル・要件などにも言及した。一般的には、正看護師または准看護師の国家資格取得だけだが、遊佐・常務理事は3～5年程度の臨床経験の必要性を強調。理由として健康観察（バイタル測定、持病の状態確認など）、医師の指示による医療処置（点滴、インスリン注射、服薬管理、在宅酸素・呼吸器の管理、医療機器の管理など）、日常生活のサポート（食事や排泄（はいせつ）、入浴、移乗の介助、認知症ケア、リハビリテーションなど）、家族の相談対応、在宅での看取り、記録など業務が多岐にわたることを挙げ、「サービスの質を考えると、ある程度の臨床経験がないと難しい」との見解を示した。

求められる能力には①観察力、②行動力、③考察力、④創作（工夫）力、⑤コミュニケーション力、⑥協調性、⑦持久力――の7項目を列挙。ただし、「最初からすべて兼ね備える人はいません。大切なのは意識して高め続けること」を強調した。適性にも触れ、一人ひとりの患者さんにじっくり寄り添って看護を提供したい人、コミュニケーションを図ることが好きな人、外での活動や外部の人との交流に関心がある人、家庭環境などから夜勤ができない人などは「適性がある」とした。

一方で、「向かない人」には、急性期医療をはじめ生活よりも命そのものを助けたい人、手術など医療処置に関心がある人などを挙げた。訪問看護師の1日の基本スケジュールも提示し、訪問はおおよそ4～5件、夜勤はない（当番制によるオンコールはあり）ことを説明した。

後半は、現場で活躍する訪問看護師の声を紹介。訪看ＳＴわかば（静岡県）の永田美紀看護師、愛心訪看ＳＴ（神奈川県）の鈴木照世看護師（緩和ケア認定看護師）、茅ヶ崎駅前訪看ＳＴ（同）の鈴木恵子所長（看護師）が、訪問看護師として働くようになった経緯、日々の業務の様子、訪問看護の魅力・やりがい、患者さんの声、教育環境などをスライドで説明した。

実際に対応した患者さんとのエピソードを披露する場面もあり、終末期の患者さんの「自宅に帰りたい」、「好きなお酒を飲みたい」、「釣りをしたい」といった希望をかなえ、あらためて訪問看護の魅力、やりがいの大きさを強調した。研修などを通じスキルアップが図れる環境も伝えた。最後に、遊佐・常務理事が訪看ＳＴでの待遇面、訪問看護師としての教育環境、キャリアパスなどを提示し終了した。

岸和田病院消化器内科

チーム一体感高める

エンブレム刺繍の白衣導入

同じ白衣で一体感を高める消化器内科チーム

エンブレムは内視鏡と星を掛け合わせたデザイン

岸和田徳洲会病院（大阪府）消化器内科はエンブレムを刺繍した白衣を導入し、チームの一体感を高めている。同科所属の医師は離島・へき地などへの出張が多く、メンバー全員が集合する機会は多くない。そこでチームに一体感を出すため、まずはスクラブ（医療用ウェア）を統一。さらに白衣も導入するにあたり、個々の思考や体型により、フォームやサイズなどにばらつきが見られたため、エンブレムの刺繍を統一するように工夫した。

エンブレムのデザインは同科の露口恵理医師が担当。「当初、星3つのアイデアを検討していましたが、井上太郎先生（副院長兼内視鏡センター長）から『星は5つにしよう』と提案があり、現在のデザインに決まりました。チームのみんなが気に入ってくれ、うれしく思います」と笑顔。

さらに「私たちは日々、日本全国の離島・へき地で内視鏡治療をしていますが、この白衣とエンブレムをとおして一丸となり、最高の内視鏡チームとなれるよう、今後も頑張っていきます」と意欲的だ。